

Studies Review

No.6

March,2002

CONTENTS

Articles

- Intimate Partner Violence in Japan
—Survey of Domestic Violence in Ibaraki Prefecture of Japan—
..... Bunri Tatsuno and Satomi Nakajima 1
- Conventional Armes Balance after the Cold-War Tsuneharu Higuchi 13
- Reflection Diary: Its Potential in a Foreign Language Classroom
..... Mayumi Watanabe 39
- The Invitation to the International Conference of the Red Cross in Japan
..... Akiko Iimori 51
- Chiang Kai-shek's diplomacy in Taiwan:
The principle and compromise concerning the United Nations' issues in 1961
..... Rei shimizu 73

Research Note

- How to get Money for the Value of Information
—A Basic Theory of Information Industry, Part I Eiichi Kato 95
- The Potential of Online Education and e-Learning
in Canadian Higher Education InstitutionsJunichi kawashima 109
- Fraud detection and auditor's responsibility
—study on professional standards and common law. ... Hisashi Fukushima 121
- View on Amendment of Japanese Laws in 2001 Shinako Matsui 143

Book Review

- Anthony D. Smith, Nationalism and Modernism (London, New York/1998)
..... Sugao Kawanura 155

Insights in Academic Society

- The 44th Meeting of the Permanent International Altaistic Conference
..... Junko Miyawaki 159

College of Applied International Studies
Tokiya University

常磐国際紀要

Tokiwa International Studies Review

第6号

2002年3月

研究論文

- Intimate Partner Violence in Japan
 -Survey of Domestic Violence in Ibaraki Prefecture of Japan-
 辰野 文理・中島 聡美 1
- 冷戦後の通常戦力バランス 樋口 恒晴 13
- Reflection Diary: Its Potential in a Foreign Language Classroom ... 渡邊真由美 39
- 赤十字国際会議と東京招致問題 飯森 明子 51
- 台湾における蒋介石外交
 -1961年の国連問題をめぐる原則と妥協- 清水 麗 73

研究ノート

- 情報産業基礎理論 I
 -情報の交換価値の收受方法- 加藤 栄一 95
- カナダの高等教育機関におけるオンライン教育・学習の可能性 川島 淳一 109
- 不正摘発と監査人の責任
 -専門職業基準及び判例の観点からの考察- 福嶋 壽 121
- 平成13年の法改正について 松井志菜子 143

書 評

- Anthony D. Smith, Nationalism and Modernism
 (London, New York/1998) 川村 清夫 155

学会報告

- 第44回国際アルタイ学会 宮脇 淳子 159

常磐大学国際学部

第44回国際アルタイ学会

宮脇淳子

The 44th Meeting of the Permanent International Altaistic Conference

常設国際アルタイ学会 (Permanent International Altaistic Conference、略称PIAC) の第44回会議は、2001年8月26日から31日まで、ドイツ連邦共和国のケルン市とボン市の中間にある、ヴァルバーベルクという小さな村のドミニコ会修道院 (Dominikanerkloster St. Albert und Tagungsstätte Walberberg) で開催された。今回の会長は、ボン大学中央アジア言語文化研究所のヴェロニカ・ファイト (Veronika Veit) 教授 (女) で、会議の中心題目 (central theme) は『男は彼の妻と異なった振る舞いをしてはならない (モンゴルの諺)』アルタイ世界における女の役割』というものだった。

宮脇は、夫の岡田英弘 (東京外国語大学名誉教授、常磐大学元教授) とこれに参加したが、かつて岡田英弘は、本誌『常磐国際紀要』の第2号 (1998年) と第3号 (1999年) に、第40回、第41回国際アルタイ学会参加報告を寄稿している。第2号にすでに記載があるが、アルタイ学というのは、アルタイ語族の言語、すなわちトルコ語、モンゴル語、満洲・トゥングース語を話す人々の言語・歴史・文化の研究で、この人々が住む地域が東北アジア、北アジア、中央アジア、西アジア、東ヨーロッパにまたがることから、中央ユーラシア学とも呼ばれる。

常設国際アルタイ学会は、1957年、ソ連でフルシチョフ党第一書記が東西平和共存を呼びかけ、デタントが始まったその機運に乗じて、東西の緊張緩和に貢献するために創設された。初代の書記長 (Secretary General) に選ばれたのが、今回の会議の主宰者ファイト教授の先生にあたる、ボン大学のヴァルター・ハイシヒ教授で、翌1958年に当時の西ドイツのミュンヘンで第一回大会が開かれて以来、毎年かかさず夏に、世界各地で開催されてきた。1995年の第38回会議は、岡田英弘が会長になって、はじめて日本に招聘したが、宮脇はその会議の事務局長を務めた。

毎年開催しているため、開催場所と時期を知らせる第一回回状 (first circular) は、前年の末に届くのがやっとなのである。今回も2000年末に第一回回状が届き、出席の返事をした者だけに、2001年5月ようやく、会場への案内や参加の手続きなど、会議の詳細を記した第二回回状 (second

circular) が届いた。

会場となったドミニコ会修道院は、廃墟となっていた貴族の館を買い取って再建したという、森に囲まれた城のような美しい建物で、宿泊施設つきのセミナーハウスを経営している。ボン市とケルン市を結ぶ単線のローカル線の無人駅から徒歩15分はかかり、空港からもかなり離れている。閑静この上もなく、シンプルで清潔な各部屋には宗教画が掛けられ、テレビもラジオもない。食堂にはアルコールは置いていないが、食事はとてもおいしかった。

会費は、5泊6日の宿泊と食事と遠足 (Excursion) すべて込みで、シャワールーム付きの個室なら950DM、シャワールーム付きの相部屋なら1人890DM、シャワールームなしの個室685DM、シャワールームなしの相部屋1人655DMとなっていた。当時1ドイツマルクが52円強で、参加費は5万円以下であるが、前もって指定されたドイツの銀行に振り込んだために、手数料は日本とドイツ両方でかかった。

国際アルタイ学会は、普通、中心題目はあっても、これに関係のない自由な研究発表をする参加者も多く、会議紀要に結局すべて掲載されることもよくある。ところが、今回の会長の態度は、「無関係な主題のペーパーは、プログラムにも入れないし、紀要にも載せない」という、きびしいものだった。アルタイ世界における、主として遊牧民の女の役割についての研究発表となると、専門でない研究者も多く、そのため、言語学者のなかには、参加を見合わせた人もあったようである。それでも名簿に記載された参加者は60人 (同伴者や訪問者は除く) にのぼり、まずまずの盛会であった。その中で女性は25人と盛況だったが、もともとロシアやヨーロッパのアルタイ学者には女性が多いのである。

国別の参加者数では、国内にアルタイ語族をたくさんかかえるロシア連邦が最大で15人 (ゴルノ・アルタイ共和国4人、バシコルトスタン共和国3人、ハカス共和国1人などを含む)、次いで今回の開催国ドイツ11人、アメリカ4人、日本4人、ハンガリー4人、チェコ4人、イタリア3人、スイス2人、ポーランド2人、中国2人 (モンゴル人)、1人だけの参加者は、トルコ (いつもは非常に多いのだが)、中央アジアのカザフスタン、キルギズスタン、それから、カナダ、フランス、ベルギー、オーストリア、オランダ、スロバキアからだった。日本からの4人は、われわれ岡田・宮脇夫婦と、言語学者の田中克彦一橋大学名誉教授、早稲田大学で教鞭を執っているアメリカ人のロジスキー William Rozyckiである。

岡田は、この国際アルタイ学会にはじめて参加したのは、ボン大学に留学していた最中の1964年の第7回会議で、2回目の参加は1977年の第20回会議、そして、今回と同じヴァルパーベルクで開催された1984年の第27回会議以降、ほとんど毎年参加している。宮脇は、1985年ヴェネチアで開催された第28回会議に、岡田に連れられて参加して以来、同様にほぼ毎年参加して、研究発表をおこなっている。

1999年にチェコのプラハで開かれた第42回会議にも、われわれはもちろん参加するつもりでいたが、直前にキャンセルすることになった。岡田英弘が、常磐大学国際学部教授に就任して4年目の1999年4月21日朝、突然脳梗塞で倒れて、言語障害を起こしたからである。朝起きた時にはすでにろれつがまわらなくなっており、駒込駅前の自宅から救急車で千駄木の日本医科大学付属病院に運び込まれた時、自分の名前がようやく言えるだけだった。幸い、処置もよく、右半身のまひが軽かったので、一ヶ月後に退院し自宅療養になったが、ことばの出にくい喚語障害はずっと残った。日本語も英語も、聞いたり読んだりした時には理解できるのだが、自分から話すのはかなり困難だった。

毎週通院して、言語聴覚士のもとで懸命にリハビリをしている最中の1999年8月末、第42回国際アルタイ学会の最終日、e-mailでわれわれのコンピューターに、岡田がこの年のゴールド・メダルを受賞したという連絡が入った。通称PIAC Medalとも呼ぶこの賞は、正式にはインディアナ大学アルタイ学賞 (Indiana University Prize for Altaic Studies) という。生涯を通じて、世界のアルタイ学に貢献したと認められる学者に贈られる荣誉ある賞で、1963年の第1回は、著名なモンゴル学者の淳心会神父モスタールト Antoine Mostaert (ベルギー人) が受賞した。それ以来、該当者なしの年もあるが、おおむね毎年1人、世界中の著名なアルタイ学者に贈られてきた。日本人では、モンゴル言語学者の故服部四郎東京大学名誉教授が、1983年に受賞して以来、岡田が2人目である。名前を刻んだ小さな純金メダル1つ贈られるだけだが、過去の受賞者リストが素晴らしいので、非常な名誉と考えられている。

この受賞は、リハビリ中の岡田にとって何よりの励ましとなった。来年のPIACには絶対参加して、みんなに受賞のお礼を言う、と言い、不自由な右手でコンピューターにも向かい、2000年の会議に向けて、かなり早くから英語の論文も準備した。ベルギーで開催された2000年の第43回国際アルタイ学会には、減塩の機内食を予約し、宮脇の介添えでなんとか参加することはできたが、発表のあと高熱を出し、友人と話すことも自由ではなかった。それでも、岡田が病気で倒れて以来、心配し続けていた古い友人たちは、岡田の参加を心から喜んでくれたし、宮脇には、「奥さんが岩のように (like a rock、物事に動ぜず、頼りがいがある、という意味らしい) 幸いだった」と、慰労の言葉をかけてくれた。

今回、われわれは時差を直す意味もあり、学会の2日前に現地入りした。なるべく岡田の身体に負担をかけないように、SASのビジネスクラスの夫婦割引を利用したため、コペンハーゲン経由で、ケルン・ボン空港に着いたのは夜9時だった。タクシーも場所をよく知らず、地図を見ながら修道院に到着した時には、すでに鍵がかかっている、中に入れないう。ドアの内側のデスクには、われわれの名前と部屋の鍵があることはわかっているのだが、そこに入れないうのでは、どうしようもない。途方にくれていたら、誠に幸いなことに、宿泊中の別のグループが、遊びに出るために内側から鍵を開けて出てきた。理由を説明して、中に入れてもらい、無事に部屋に入ることができたのである。

2日間の自由時間を利用して、8月25日(土)はケルン市へ、26日(日)はボン市を訪問した。岡田は32歳から34歳までの2年間、ボン大学のハイシヒ先生のところでモンゴル年代記を研究し、毎週ケルン大学のフックス先生のところに通って満洲学を研究していたので、38年前の思い出の地の再訪であった。実は、1988年秋の3ヶ月、岡田がボン大学に招聘された時、宮脇もついて行って2人で滞在していたので、13年前の思い出も重なる。すべて、岡田のリハビリになるだろうという考えのもとで、懐かしい場所を歩き回った。ケルン市では、繁華な通りを若者がたくさん歩いていたが、ボン市は日曜日だったせいもあって、人通りも少なく、かつては「首都村ボン (Bundeshauptdorf Bonn)」とからかわれたが、実際に首都がベルリンに行ってしまった今となっては、本当に古い村に戻ったようだった。ケルン・ボン空港も、拡張工事がされて、空港の建物はやたらに大きくなっていて、駐機している飛行機の数まばらで、出店数も少なく、空いている場所ばかりが目立った。

8月26日(日)の午後から修道院のロビーで参加登録 (Registration) が始まり、18時半からは、歓迎の夕食会が、食堂の中でも一番大きな第三食堂 (Speisesaal 3) で催された。

8月27日(月)の朝9時15分に、大講堂 (Aula) において、総会が行われた。先ずファイト会長が歓迎の辞を述べて開会を宣し、ついで書記長 (Secretary General) のデニス・サイナー (Denis Sinor) 名誉教授 (アメリカ合衆国インディアナ大学) の司会で、着席している順に、コンフェッションズ (Confessions) が行われた。これは、参加者全員が自己紹介をし、最近発表した著作と、いま何を研究しているかを報告するものである。会議の公用語は、英語とフランス語とドイツ語だが、みなだいたい英語で話す。ロシア語やモンゴル語やトルコ語しかできない場合は、ふつう誰かが出て行って、通訳してやる。

10時半からのコーヒー・ブレイクをはさんで、コンフェッションズは12時半からの昼食まで続けられた。

午後は14時半から、2部会に分かれてペーパー・リーディングがあった。2001年12月に満88歳になる、本学会の初代書記長ハイシヒ名誉教授が、奥様の介添えで会場に現れ、弟子である岡田の司会で、最初に研究発表をおこなったのには、みな拍手喝采だった。

【第1部会その1】 司会 岡田英弘

- ハイシヒ W. Heissig, 「モンゴル民衆文学における魔女の火刑の主題」 "Das Motiv der Hexenverbrennung in der mongolischen Volksdichtung"
- ミザーヴ (女) R. Meserve, 「赤い魔女」 "The Red Witch"
- ビルタラン (女) A. Birtalan, 「アダ——モンゴルの神話・民俗における有害な女の精霊」 "Ada: A Harmful Female Spirit in Mongolian Mythology and Folk Belief"

○ニマ Nima, 「女神たちとその歴史的機能」 "Em-e küisütü sitügen kiged tegün-ü teüke üiledün" (モンゴル語)

これはファイトが、その英語の要約 "Female gods and their historical function" を読んだ。

○シャルキョジ (女) A. Sárközi, 「白傘蓋女菩薩よ、われらを護りたまえ！」 "Goddess With the White Parasol! Protect Us!"

【第2部会その1】 司会 フレデリク・コルトラント

○センドルジャブ A. Senderzav, 「現代ハルハ・モンゴル語における女性的なものの呼称」
"Bezeichnungen des Weiblichen im modernen Khalkha-Mongolisch"

○カルホフナー P. Kalchofner, 「モンゴル語の女性を表す方法」 "How to Express Feminine Gender in Mongolian"

○シェンツォヴァ (女) I. Shentsova, 「シオル語 (南シベリアのトルコ語) における女性語の痕跡」
"Traces of Feminine Language in Shor [South Siberian Turkic]"

○クルペシコ N.N. Kurpeshko, 「シオル共同体における女性名の分析」 "The Analysis of Female Names in the Shor Community"

○ティディコヴァ (女) N. Tydykova, 「アルタイ英雄叙事詩における女の名前の言語学的分析」
"Linguistic Features of Women's Names in the Altaian Heroic Epic"

○リュバツキ V. Rybatzki, 「中期モンゴル語の女の名前について」 "Some Middle Mongolian Female Names"

○ディボ A. Dybo, 「アルタイ系言語における贈物の名前」 "Names in Gifts in Altaic Languages"

8月28日(火)

【第1部会その2】 司会 アリス・シャルキョジ

○フライ＝ナエフ (女) B. Frey-Naef, 「『女たちに比べれば……男たちは自分のものと決まった仕事がない (パラス、1776年)』: モンゴル人の歴史における労働の性による分担」 "Compared With the Women the …… Menfolk Have Little Business of Their Own" [P. S. Pallas, 1776].
Gender division of labour in the history of the Mongols"

○セツェンムンフ Setsenmunh, 「モンゴルの伝統社会における女の役割」 "Role of women in Mongolian traditional society"

○シュリューター (女) E. Schlueter, 「オイラト・カルムイク社会における女の役割」 "The Role of Women in the Oirat-Kalmyk Society"

○ゴリマン M. I. Gol'man, 「17世紀のロシア古文書に見るモンゴルの女」 "The Mongolian

Women in the Russian Archives of the XVIIth Century"

- オクチャブリスカヤ (女) I. Oktyabrskaya, 「アルタイ・トルコ人の男の文化と女の文化」
"Masculine and Feminine Cultures of the Altaic Turks"

【第2部会その2】 司会 チャールズ・カールソン

- ヒサミツィノヴァ (女) F. Hisamitsinova, 「バシキル人の家族の中の母の役割と身分」 "Die Rolle und der Status der Mutter in der baschkirischen Familie"
- ラティポヴァ (女) F. Latypova, 「バシコルトスタン共和国における女の公的権威」 "Women in Public Authority in the Republic of Bashkortostan"
- チティルバエヴァ (女) J. Chytyrbaeva, 「現代キルギズスタンの女：独立10年後」 "Women of Contemporary Kyrgyzstan: ten years after independence"
- バイカラ T. Baykara, 「女のバーザール」 "Women's Bazaar"
- アナイバン (女) Z. Anayban, 「ロシア社会の変動の過程におけるトゥヴァの女たち」 "The Women of Tuva in the Process of Transformation of the Russian Society"

【第1部会その3】 司会 ルース・ミザーヴ

- スターリ G. Stary, 「清の官書における3人の女英雄と彼女らの『運命』」 "Three Manchu Heroines and their 'Destiny' in Qing Historiography"
- パン (女) T. Pang, 「清太祖ヌルハチの第二夫人グンダイの運命」 "The Destiny of Qing Taizu Nurhaci's Second Wife Gundai"
- ドロンプ M. Drompp, 「可敦から降人へ：ウイグルの太和公主」 "From Qatun to Refugee: the T'ai-ho Princess among the Uighurs"
- ロジスキー W. Rozycki, 「カルムイク公主の手紙：1820年代のツェベクのオイラト文字の通信」
"Letters from a Kalmyk Princess: Oirat-Script Correspondence by Cebeq in the 1820's"

【第2部会その3】 司会 マルク・ゴリマン

- ボイコヴァ (女) E.V. Boikova, 「革命以前のモンゴルにおける世俗結婚」 "Civil Marriage in Pre-revolutionary Mongolia"
- ソソツェヴァ (女) N. Solntseva, 「東南アジア諸語とモンゴル語における女の代名詞と親族名称」 "Pronouns and Kinship Terms Used for Women in South-East Asian Languages and in Mongolian Languages"
- ガーリック J. M. Gálik, 「第24番目のナスレディン？ ワン・メンの話に見る女」 "The 24th

Nasreddin? Women in Wang Meng's Stories"

このあと17時15分に、参加者全員が貸し切りバスに乗って、ボン市の中心部にある、ボン大学の講堂に至り、18時から副学長のアンドレアス・ヒルナー Andreas Hirner教授の招宴があった。ただし飲み物のみで、夕食はバスで修道院に帰って、20時からであった。

8月29日(水)

【第1部会その4】 司会 バルバラ・ケルナー＝ハインケレ

- ライト D. Wright, 「契丹の皇太后の政治力と軍事力」 "The Political and Military Power of Kitan Dowagers"
- 宮脇 (岡田) 淳子 (女) J. Miyawaki-Okada, 「遊牧帝国の帝位継承における女の役割」 "The Role of Women in the Imperial Succession of the Nomadic Empire"
- 岡田英弘 H. Okada, 「『蒙古源流』に見る女の役割：特に帝国期以後について」 "The role of women in the *Erdeni-yin Tobchi*: The post-imperial period in particular"
- サイナー D. Sinor, 「内陸アジアの歴史に見る驚くべき女たち」 "Some Remarkable Women in Inner Asian History"
- ギースアウフ J. Giessauf, 「異邦人の知覚：ヨーロッパの史料に映ったモンゴル帝国の女たち」 "Die Wahrnehmung des Fremden : Frauen im mongolischen Weltreich im Spiegel europäischer Quellen"
- トリヤルスキ E. Tryjarski, 「17世紀のポーランド史料に見るトルコ女の記録」 "An Account of Turkish Women in a Polish Work of the 17th Century"

【第2部会その4】 司会 ジョヴァンニ・スターリ

- ポッツィ A. Pozzi (女), 「満洲族の女性」 "Manchu Women"
- ヴァルラーヴェンス H. Walravens, 「満洲語の婦人科学」 "Eine mandjurische Gynäkologie"
- タウベ (女) J. Taube, 「アルバストゥと乳房が多いことの主題」 "Albasty und das Motiv der Vielbrüstigkeit"

この日の午後はエクスカーション (遠足) で、14時15分にバスで修道院を出発し、15時にライン河畔の、かつてボンが西ドイツの首都だった頃、中央官庁がたくさんあったバート・ゴードスベルク Bad Godesbergに至った。ここで、学会の参加者たちは、貸し切りボートに乗り移り、レマゲン Remagenの下までライン河上りを楽しんだ。有名なローレイ Loreleiの岩はもっと上流にあり、今回は時間の関係でそこまでは行かずに、ボートは引き返し、18時半にはもとの地点に戻った。そこで再びバスに乗り、夕食は修道院に帰って20時からであった。学会を主催した経験者から言うと、

これはもっとも楽な遠足である。ボートに乗せてしまえば、どこでも見失う心配はない。ビールやワインその他何でも飲み放題、生クリーム付きのケーキも好きなだけどうぞ、というわけで、全員大いに満足して、友人たちとの会話と、兩岸の眺めを楽しんだ。

8月30日(休)

【第1部会その5】 司会 エドヴァルド・トリヤルスキ

- ケルナー＝ハインケレ (女) B. Kellner-Heinkele, 「アブールガージー・バハードゥル・ハーンと、有名な、またはそれほど有名でない女たち」 "Abu l'Gazi Bahadur Khan and the famous and not so famous women"
- ジモニイ I. Zimonyi, 「オズベク・ハーンの第一夫人についてのイブン・バットウータの記述」 "Ibn Battuta on the first wife of Özbek Khan"
- ラム (女) Y. C. R. Lam, 「薩法禮 (至順二年卒) : ホタン出身の貞婦」 "Sa-fa-li (d. 1331) : a chaste wife from Khotan"
- チョローエフ T. Tchoroev, 「マフムード・アル・カーシュガリーの『ディーワーン』と『元朝秘史』に見る遊牧女の社会生活 [11世紀と13世紀]」 "Nomadic Women's Social Life according to Makhmud al-Kashgari's 'Diwan' and 'Mongolyn ni'ucha tobchiyan' [XI and XIII cent.]"
- ヴァン・トンゲルロー A. van Tongerlo, 「夜明け嬢: マニ教徒のウイグル婦人」 "Miss Dawn: a Manichaeen Uighur Lady"

本人不在につき、原稿はデュルステル K. D'Hulster が読んだ。

【第2部会その5】 司会 エリカ・タウベ

- ドロヴィツ M. Dobrovits, 「塔に幽閉された姫: トルコの民族起源群の問題」 "The Maiden in the Tower. The question of a Turkic ethnogenetical cycle"
- サダロヴァ (女) T. Sadalova, 「アルタイ人の女の世界観」 "Women's World Outlook by the Altaians"
- トルビナ (女) M. Tolbina, 「アルタイ人の歌に見る女の運命の諸問題」 "Women's Fate Problems in Altaian Songs"

午後は、第1部会は終了し、第2部会だけしかなかった。

【第2部会その6】 司会 ニーナ・ソンツェヴァ

- アルパートフ V. M. Alpatov, 「日本語の女ことば」 "Female Variant of Japanese"
- タウベ (女) E. Taube, 「トゥヴァ人の詩における女の役割」 "Die Rolle der Frau in der Dichtung"

der Tuviner"

- カシムバーエフ Zh. Kassymbayev 「新しい古文書史料による、1771年のヴォルガ・カルムイクがカザフ草原を通過して清に移住した事件」 "Resettlement of the Volga Kalmyks in China through the Kazakh Steppes in 1771, according to New Archive Material"
- ラティポフ F. R. Latypov, 「トルコ語母胎の世界における女」 "Women in the Parent-Turkic World"

これでペーパー・リーディングを終わり、17時から総会 (Business Meeting) があった。本年度のインディアナ大学アルタイ学賞は、ハンガリーのローナ＝タシュ (András Róna-Tás) が受賞した。アルタイ学賞選考の仕組みは、国際アルタイ学会に3回以上参加した実績のあるメンバーが、毎年投票で、3人の翌年の賞選考委員を選ぶ。その3人に、デニス・サイナー Denis Sinor 書記長 (書記長も5年ごとにメンバーが選挙するのだが、サイナー書記長がずっと再選されて、過去40年間その地位にある) と、その年の会長を加えた計5名で、受賞者を選ぶのである。会員の投票によって、来年の賞選考委員に、ロシア科学アカデミーのアルパートフ、ヴェネチア大学教授スターリ、岡田英弘が選ばれた。

ファイト会長から、今回の会議紀要 (Proceedings) は、ドイツのヴィースバーデン Wiesbaden にある有名な学術書出版社ハラソヴィッツ Harrassowitz から刊行予定であると発表された。掲載論文は、英語、フランス語、ドイツ語のいずれかで書き、2002年5月1日までに、フロッピーディスクを付けて、事務局に届けるということである。

次いで、2002年の第45回会議をハンガリーに招待すると、シャルルキョジが発表した。ファイト会長が閉会を宣し、ここに第44回国際アルタイ学会はめでたく終了した。

夕食後、20時15分から、大講堂において、ドイツを中心に世界で演奏活動をおこなっている、ウルナ Urna という内モンゴル出身の女性歌手が、ドイツ人のツィター弾き、ハンガリー人のヴァイオリン弾き、オーストリア人のアコーディオン弾きを従えて、モンゴルの歌を歌い、満場の拍手を浴びた。その夜は大講堂の地下のバーで、名残りを惜しんで、いくつものグループが夜遅くまで会話を楽しんだ。

8月31日(土)の朝食後、正式に解散した。